

## 批評と紹介

メアリー・C・ライト 「中國保守

主義最後の牙城——同治中興」

市古宙三

Mary Clabaugh Wright: The Last

Stand of Chinese Conservatism; The

Tung-chih Restoration, 1862-1874.

California, Stanford University Press,

1957. 426 p. 25 × 16 cm.

著者M・C・ライト女史は、夫君のA・F・ライト氏とともに、アメリカにおける中國研究者の中堅であつて、いまはスタンフォード大學 The Hoover Institute and Libraryの助教授で、また中國資料の主任司書を兼ねている。一九四〇—四二年には京都および北京に學び、戦争直後の一九四五—四七年にも中國諸都市を訪れ、また一九五三—五四年には京都大學で研究に従事した。この間ハーヴァード大學のJ・

K・フェアバンク教授について「同治中興」の研究をし、一九五一年にラドクリフで博士の學位を得た。

本書は同女史の學位論文「同治中興の研究」を改訂増補したもので、同治中興はいつからはじまつたか (II. The new era) 中興期に西洋列強はどのような態度で中國に臨んだか (III. The co-operative policy) 中興の指導理念は何であつたか (IV. The idea of a restoration) 誰が中興の事業に參與し、また行政面ではどのような改革がなされたか (V. The restoration of civil government) 太平天國・捻匪・回教徒その他の叛亂はどのようにして鎮定されたか (VI. The suppression of rebellion) 地方の支配はどのようにして確保されたか (VII. The re-establishment of local control) 經濟の復興はどのようになされたか (VIII. The rehabilitation of Chinese economy) 自強運動はどうであつたか (IX. The self-strengthening movement) 外政機構はどのように近代化されたか (X. The modernization of China's system of foreign relations) とどう風に、同治中興をあらゆる面から詳細に検討し、最後に、中興の精神面をまねようとして失敗した一九二八年以後の中國國民黨のことを附録している。

本書の特色は次の四つの點にある。

(4)、同治中興の研究は、部分的な研究でも、いたつて乏しい。ところが本書では、同治の中興が、あらゆる角度から詳細に検討されている。この點で他に類書をみない。

(5)、ライト女史は同治中興を、近代中國を理解するための一つのケース・スタディーとして取りあげた。従つて叙述は單に同治中興のみに限らない。およそ近代中國を理解するために重要と思われるものは——たとえば、中央集權と地方分權の問題（五七—五九頁）、經濟的停滞性の問題（一九〇—一九五頁）等——同治中興に關連して取り扱われている。それゆえに、中國近代史——というよりも十九世紀の中國史といつた方が適切かも知れない——を理解する上に大いに役立つ。

(6)、中文・歐文の資料を豊富に使用して實證につとめ、また中國人・歐米人のみならず日本人の研究をも十分に利用している。このことは、脚註のほかにも、卷末に附された註が八二頁、参考文献目録が一四頁あることによつても推測されよう。この點は、第二の特色とあわせて、本書を、これから近代中國を學ぼうとする人のよい入門書にしている。

(7)、本書でライト女史が主としていおうとしているのは、次の點である。

(1)、同治中興はその失敗の故に功績を忘れられがちであ

るが、太平天國・捻匪などの鎮壓に成功する、戦後軍隊の數を縮小したが軍事力は却つて増強される、地租の率は引き下げられたが歳入は増す、荒地の開墾を積極的にする、捐納による任官を制限し科擧制度を整備する、中國商人が外國貿易で外國商人よりも活躍する、外國軍隊は撤退し、外國の干渉と壓力とはどの時代よりも減少する、近代的な外交機關である總理衙門を創設し、その官吏を外交官に仕上げる、等は、同治中興のなしたげた成果として、より高く評價されねばならない。

(2)、このような偉大な成果をあげながら、ついに同治中興が失敗しなければならなかつたのは、中興の指導理念が儒教のイデオロギーであつて、儒教的社會秩序・儒教的政治制度の恢復がその目的であつたからである。農業社會が生んだ、禮に基づく社會の安定を求める儒教的イデオロギーは、終局のところ中國を近代化させるものではない、いや却つて近代化を阻止するものにほかならない。だから中興期の經濟政策をみるに、地租の軽減によつて農業社會を安定させることはできたけれども、生産の増強ということには考慮されず、さらに商工業の發達ということは全く意に介されない。また西洋の裝備と訓練とをとりいれて近代的な軍隊を作ることには成功したが、現在の社會秩序を維持

しながら有能な中堅將校を養成することはできなかったから、ついにフランスや日本に一敗地にまみれてしまった。

また中國の傳統的官僚制度では、官吏は人の和をはかるための存在であつて、専門の事務は、幕友・胥吏に委ねる。しかしして事務の簡單なときにはいいが、西洋と接觸して事務が繁雜になると、勢い胥吏をばつこさせることになり、胥吏のばつこは傳統的制度を改編しない限り、防ぐことができない。

(4) 中國を近代世界に適應させる障害になつたものは、帝國主義諸國の侵略だ、滿洲の支配だ、などとよくいわれるが、そうではない。儒教的機構のうちにあるものがその障害となつたのである。

以上の三點をさらに要約すれば、中國を衰弱させたのは、帝國主義勢力の侵略だ、滿洲の支配だというけれども、そうではない、儒教的イデオロギーによつて中國を近代化させようとした所に誤りがあるのであつて、そこに同治中興の限界もあつたということになる。そしてこの、中國の發展を阻害したものは帝國主義だという、中國や日本で、特にコミュニケーションやマルキストの間で、よくいわれている説を論駁するためには、さらに幾多のこれまでの通説の如くみられた解釋を再吟味し論駁している。考えてみるに、これまで學界で通説

の如くにいわれているものの中には、何らの適確な證據もなく、ただ觀念的に、あるいは政治的意圖をもつて語られたものが少くない。これらを徹底的に批判し再検討した點に、本書の最も著しい特色があり、女史の解釋の中には、わたくしたち専門家の傾聽すべきもの、示唆をうけるものが少くない。本書は、さきにものべたように、廣範な問題を多角度から考察したものであつて、限られた紙面に章を追うて内容を紹介することはむづかしい。以下、第四の特色のところでのべた、ライト女史の通説を批判した見解の若干を抽出するにとどめる。もとよりこのほかにも、今まで誰も気がつかなかつた女史の新しい解釋はいろ／＼あり、その方が重要かも知れないが、それらはここには省略することとする。

(1) 清軍が太平天國の亂を鎮定しえたのは外國の援助による、外國が太平天國を壓殺したのだとよくいわれるが、外國の援助が亂の鎮定に果たした役割は第二義的にすぎない。捻匪の亂・回教徒の亂における外國の役割もまた同然である。同治の將領たちは喜んで、個人の外國人をやとい、外國製の武器をかつたが、しかしそれはあくまでも、自分たちの支配下に嚴重におくことを前提としてであつた。(二〇一・一〇七・一一三・二一四—二二〇頁)。

(2) 同治中興の成否を支配したものは外國のようにもいわ

れるが、イギリス政府をはじめ西洋諸國の政府は中國との協調政策をとつたのであつて、中國のことは清朝政府の自由にまかせてみだりに壓力を加えたり干渉をしたりすることはなかつた(二二—四二頁)。そのみではない。少くともイギリス政府は、條約改正問題を通じて、中國側の主張もよくきいた。だから一八六九年に調印した *Alcock Convention* では、イギリス人の最惠國民待遇權に多少の制約を加え、アヘンの輸入税、生糸の輸出税を増額し、中國領事のイギリス駐紮を認めるなど、中國側に利益となる條項も少なからず入れた。(二七九—二九五頁)。

(3) 滿洲人がシナを外國に賣つたと、シナ人はいうが、同治年間、清朝一代を通じて、滿洲人とシナ人との間隔が最も少なかつたとき、滿洲人とシナ人との利害が最もよく一致していたときである。(五一—五六頁)。

(4) 太平天國以來地方分權の傾向が増大して中央政府が弱化したというが、それは一八九〇年代以後のことで、同治年間においては中央と地方の權力はよく均衡を保つていた。會國藩は決してのちにみられるような地方軍閥ではなく、儒教的秩序の維持を目的としてたちあがつたのであつて、その點、中央官僚との間に對立があつたわけではない。湘軍や淮軍は地方に根據をもつた國民軍であつた。(五七—五九・一九八・

一九九・二二〇・二二一頁)。

(5) 釐金は、地方軍閥を財政的に獨立せしめたとか、中國國民經濟の發達を阻止したとか、官僚を腐敗させたとか批難されるけれども、その反面、釐金がなければ地租を上げなければならなかつたろうことも忘れてはならない。現に一九三一年に釐金が廢止されると、地租は大きく昂騰したではないか。(一六八・一六九頁)。

(6) 海關は西洋諸國に富を貢ぐ機關だ、といわれるが、事實は逆で、ハートや海關のスタッフ達は、自國の商人から攻撃されながら、中國の國家財政に貢獻していた。(一八一頁)。

(7) 同治年代は中國近代工業發展の第一期とみなされるが、當時は、工業化が武器船艦の製造以上にできるべきものは誰も思つていなかった。工場制度により一般の生産を増強しようなどとは誰も考えなかつた。(二八四頁)。

(8) 京師同文館は中國近代化を進める第一歩として、一八六二年に發足したが、大した実績もあげることではできなかった。その失敗を、同文館が滿洲人と外國人の利益に奉仕する反シナの帝國主義者の道具であつたことに歸するものもあるが、そうではない。同文館の失敗は、他のこの時期の新しい事業の失敗と同じように、それが窮極においては儒教的國家の根本をゆり動かすものであつたからである。(二四八頁)。

ここにわたくしが抽出した八項は、いずれもわたくしには穩健な見解のように思え、女史の見解に従うのにしたたかではない。但し條件付きである。その條件というのは、同治中興期——女史のいう中興期は、總理衙門が設立され、安慶が清軍の手に入つた一八六一年から、天津教案が起り、オルコック協定が廢棄された一八七〇年に至る十年間——のことに嚴重に限る、ということである。たとえば滿漢の對立があまりなかつたことも、曾國藩がのちの地方軍閥のようなものでなかつたことも、この十年間だけをとつてみれば、誤りではないように、わたくしは思う。ライト女史も勿論この十年間のこととして強調しているのである。しかし女史はこの研究を、近代中國における保守主義理解のためのケース・スタディーとしている。このような企ての著書においては、讀者はその著者の意圖には關係なく、ひき出された結論を一般化しがちである。同治期に滿漢、中央地方の對立のなかつたことを、讀者は一般化しないであらうか。女史は後に對立が生ずることを明記している。にも拘らず對立のなかつたことが強調されているが故に本書を通讀した場合に一般化されるおそれはなしとしない。そうでなくても、對立のなかつたことを強調する必要が果してあるかどうか。というのは、近代中國を理解する上に、同治期に滿漢・中央地方の對立がなかつ

たということと、その後に対立が顯著になつたということでは、どちらが重要であるかという点、わたくしは、對立があつたというところの方をとりたいからである。もつともこれは見解の相違で、女史が對立のなかつたことを指摘したのは意義あることと思う。しかしもし後に對立をおこす基盤が、同治中興の時にあつたとすれば、少くもその点は究明してほしかつた。この問題はしばらくおくとしても、女史の最も強調する帝國主義勢力の功罪に關しては、同治期のそれを一般化しているだけに(九・一〇頁)、なおさら問題である。もとよりわたくしは、中國の近代化を阻んだものは、専ら帝國主義勢力である、などというわけではない。ライト女史のいうように儒教的秩序を固執したことが大いに近代化のさまたげになつたことはこの研究によつてよくわたくしに理解された。しかしまた女史のいうように、同治期においては帝國主義勢力によつて中國が眼にみえてむしばまれたのではないとしても、*“the obstacles to successful adaption to the modern world were not imperialist aggression”*と斷言できるかどうかは疑問に思う。現に女史は同治中興の終焉をオルコック協定の不成立においている。しかしてそれを不成立に終らせたものが、現地や本國のイギリス商人の主張であつたとすれば(二九〇—二九五頁)、同治中興を失敗

させたものに、帝國主義勢力の侵略がなかつたといえるだろうか。さきに引用した英文の結論を一般に承認させるためには、より後期の、帝國主義勢力が中國に果たした役割を緻密に考察することが必要であろう。そしてこのむづかしい仕事を、同治中興の研究に鋭利な洞察力を示したライト女史が、繼續してやられることを期待してやまない。

なおわたしにわからないのは conservative ということばである。女史が同治中興をどうして保守主義というのか、既存の儒教的社會秩序を維持しようとするが故に、これを保守主義と規定したようにも思えるが、一・二頁の叙述および太平天國を社會革命といっているところからみると、太平天國の運動をフランス革命に對比し、それを壓殺し現政權を維持しようという運動であるが故に、保守主義と呼んでいるようである。そうなれば曾國藩や李鴻章を保守反動と呼ぶコミュニストやマルキストの見解と同様にみえるのであるが、果してそうなのであるか。わたしには、太平天國の運動はフランス革命と對比されるような運動とは思えない、とても progressive とも radical とも liberal とも呼ばれるようなものとは考えられないが、女史の見解はどうなのであるか。もし女史の見解がわたくしと同じであるならば、 conservative program の比較研究のためには——それは女史

が本研究をする一つの目的であるが——同治中興は余りいい命題とはいえないように思う。それよりも、たとえば辛亥革命の方が適當ではなからうか。

(お茶の水女子大學助教)

## E・C・カールソン「開平煤礦」

松村潤

Ellsworth C. Carlson: The Kaiping  
Mines (1877-1912); Cambridge, Mass.,  
Harvard University Press, 1957. 174 p.  
28 × 11.5 cm

著者 E・C・カールソン氏は、Oberlin College の歴史學の助教授で、本書は元來ハーバード大學における學位論文として提出されたものであるが、これを更に増補して、同大學のフェアバンク教授の主宰する、中國經濟・政治研究會の研究專刊シリーズの一つとして刊行されたものである。

本書は、現在もなお、中國の最も大規模な炭礦の一つである開平炭礦の前身で、中國において最も早く西歐の近代的な機械をとり入れて採礦を始めた開平礦務局について、その創